

微笑庵便り 2019年9月号

基本彩色の前には目止めをします。それをしておかないと、木の場合は何回塗っても下から木目が浮き上がってしまいます。下塗りをして、紙やすりなどで磨いてそれから彩色に入ります。この像の場合はカシューを使うので、下地はサーフェーサー、そのうえでネオカラーの群青で下塗りをして準備完了、先生からただ一言「絶対に溜めるな!」という謎の一言だけもらって、髪の色色に入りました。

午前中にはじめ、よく覚えていないのですが、終了したのは確か2時とか、3時とかそれくらいの時間だったと思います。そしてその結果は・・・? 見事な大失敗でした。後から考えれば失敗すべくして失敗したという事なのですが、まあ、いずれにしても後の祭り。それはもう惨憺たるものでした。

カシューという素材は油性なので、希釈にはカシュー用の薄め液を使いました。ここでどれ位の濃度にするかは非常に重要な問題です。濃ければ伸びないし、薄ければ定着が弱いし、流れてしまう。本来時間とともに液は乾いて固くなるから随時濃度の調節をしなければならいわけですが、ともかくそれ以前に適切な濃度そのものが分かっていないわけですから話になりません。加えて、ともかく像が大きすぎた。そのため時間がかかりすぎ、塗り終わらないうちに最初のほうは乾いてしまうという状態が発生し、また、大きすぎて、立てたまま塗るしかなかったため、当然少しでも液が余分についたところは下に流れてしまいます。結局塗り終わったころには、肌の部分にまで、かなりの量が流れてしまっていました。加えて、これはカシューの特徴なのですが、非常に乾燥時間が長いのです。ゆっくりと乾く間にふくらみが出てこっくりした風合いになります。塗り重ねることで独特の厚みと深みが増えて漆のようになるのですが、その表面が何と言ったらよいのか“非常に強い”のです。そのため、溜まりを作ってしまうと、表面が乾いて厚い皮膜を作ってしまう、その内側はいつまでたっても固まらないという状態になります。ともかく最悪だったのはこれで、垂れてしまった所に溜まりができ、それは何日かけても乾かず中がべとべとの感じ、“絶対溜めるな!”の意味が分かった時は“時すでに遅し。乾いてくれれば何とか落とす手段も考えられるのですが、(これも岩絵の具は本来鉱物なので岩をこそげ落とすようなもので容易ではないのですが)、それ以上に乾かないものだからそれすらできないという最悪の状態。もう、どうにもならないレベルに落ち込んで、途方に暮れてしまいました。

その時の先生の一言 “初めてのこといきなりやったら失敗するに決まってる” ただそれだけ。
その時の強烈な体験は今にしてみれば本当に貴重な経験値となりました。

